様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２００９６
研究課題名（和文）　「対」概念の表象に見る精神史

研究課題名（英文）　Study on the representation of ‘couples’ in western art history

研究代表者
尾関　幸　（OZEKI　MIYUKI）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：１０３６１５５２

研究成果の概要（和文）：ドイツ・ロマン主義美術に特有の図像とされる「友愛図」は、西洋美術に見られる「明・暗」「聖・俗」「静・動」「善・悪」等の図像伝統に依拠しつつも、二者間の弁証法的な統合を強調するものである。それは「分かれ道のヘラクレス」「アモルとプシュケ」といった過去の図像伝統から発し、そこに「和解」という新たな意味を付け加えた。対概念として表現される友愛図像は、分析的時代であった十八世紀を超克し、再び宗教改革以前に存在したと信じられた全体性を希求する時代精神を象徴しているのである。

研究成果の概要（英文）： One of the typical German romantic iconography, the image of friendship represented by the ”couples”, is created upon the tradition of the image of dialectic relationship between vice and virtue, human being and god or live and death, rendered by theme such as “Heracles on the divided way” as “Amor and Psyche”, adding a new signification of „reconciliation“ or „mediation“. It was made of the romantic “Zeitgeist” that tried to overcome the analytic spirit of the Enlightenment, try to recover the entire world which supposed to have existed before the Reformation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	500,000	150,000	650,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：　美術史
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史（2806）
キーワード：友情図　ロマン主義美術　アモルとプシュケ　ナザレ派

１．研究開始当初の背景

ロマン主義の時代のドイツ美術において、いわゆる若い同性の一対を描いた「友愛図」が流行したことは、今日では西洋美術史学の一般的知識となっている。啓蒙主義の成熟とと

もに君主の力が弱体化しはじめた 18 世紀後半、君主政治の父権的束縛からの解放を願い、対等で自由な人間関係を求める精神性がその背景にあったことはいうまでもない。「自由」「平等」と並んで「兄弟愛（友情）」をスローガンに掲げたフランス革命はそうした状況を象徴している。造形芸術もそうした動きに敏感に反応したが、現実には、ナポレオンの出現によって革命の理想が帝政に絡めとられていったフランスでは、「兄弟愛」の思想が造形芸術の表現となって結実することは極めて少なく、「友愛図」は皮肉にも君主政治下にあったドイツで独自の展開を見せた。

ドイツの画家たちが同性同士の親密な感情としての「友情」を表象するにあたって形象的な範としたものとしては、「キリストの洗礼」（洗礼者ヨハネとキリスト）或いは「ご訪問」（マリアと聖エリザベツ）「エサウとヤコブ」「マリアとマルタの家のキリスト」などキリスト教美術の伝統的主題があげられてきた。しかしこうした図像伝統は、寧ろ両者の間に師弟関係など身分の差がある場合に限られている。過去の図像伝統から新しい表象としての「友情図」が生まれるまでの過程は、更に厳密に考証されなければならない。「友愛像」の変遷を体系的に取り上げた先行研究としては、クラウス・ランクハイト（Klaus Lankheit, Das Freundschaftsbild der Romantik., Heidelberg 1952）、ハラルト・ケラー（Harald Keller, “Entstehung und Bluetezeit des Freundschaftsbildes”., in: Essays in the History of Art presented to Rudolf Wittkower., Phaidon Press 1967）、大原まゆみ（「「ズラミットとマリア」から「イタリアとゲルマニア」へ―フランツ・プフォルとフリードリヒ・オーファーベックの友情図について」実践女子大学紀要『美学美術史』1986 年）、近年ではローラ・モロヴィッツ／ウィリアム・ヴォガン編『十九世紀の芸術兄弟団』（Laura Morowitz and William Vaughan, Artistic Brotherhoods in the Nineteenth Century., Ashgate Publishing England 2000）を挙げることができる。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、ドイツ・ロマン主義美術に固有の主題であるとされてきた「友愛図」を、「一対の若者」、即ち「対概念の表象」の枠組みにおいて捉えなおし、改めてその形象的特質を明らかにした上で、それが美術史全体の形象語彙において広汎な振幅をもった主題群を形成していることを証明しようとするものである。

(2) 「友愛図」は、ドイツ・ロマン主義美術に固有の主題されているが、実際に視覚的イメージの文学的原典となったものには、ギリシャ・ローマ神話やキリスト教美術の図像が含まれる。そうした因果関係を解明した上で、それがなぜフランスやイギリスではなく、ドイツ語圏において固有の図像として成立するにいたったのか、当時のヨーロッパ大陸における政治社会状況との関連において説明しようとするものである。

3.研究の方法

ロマン主義美術において典型的な友愛図と見なされるもの、ロマン主義時代に成立し友愛図との主題的関連性を示しながらも物語画として構想されたもの、さらにはルネサンスから後期バロックの間に制作された友愛図との形象的繋がりをもつ作品（「アモルとプシュケ」や「分かれ道のヘラクレス」などの主題群）の三つの分類に沿って作品調査を行い、文献収集と合わせて研究を進めていく。平成 19 年度はベルリン（Nationalgalerie）、ワイマル（Goethehaus, Schlossmuseum）、マイニンゲン（Schloss Elisabethenburg）で作品調査および文献収集を行った（カーサ・バルトルディ壁画、ヴィルヘルム・シャードウ《リドルフォ・シャードウとトーヴァルセンのいる自画像》フリードリヒ・オーファーベック《イタリアとゲルマニア》フランツ・プフォル《ズラミットとマリア》《ゲーテ＝シラー像》、《サン・イルデフォンソ群像》（ブロンズ複製）、フリードリヒ・ブリ作《オランダ王妃ヴィルヘルミーネとカッセル方伯妃アウグステ》等）。平成 20 年度はベルリンの美術図書館（Kunstbibliothek）での文献収集とマドリッドでの作品調査（サン・イルデフォンソ群像）を（Museo Prado）、最終年度の平成 21 年度にはフィレンツェ（Galleria Uffizi）及びミラノ（Brera, Museo Poldi-Pezzold）でのルネサンス期の作品を中心に調査を行った。

４．研究成果

(1) 平成 19 年度には、ドイツ・ロマン主義に特有の図像とされる「友愛図」を生み出した「ナザレ派」の精神的背景を文献調査によって分析し、それがフランス革命に留まらず、その後に起こったナポレオ

ンによる大陸支配という閉塞的状況をも反映しているという結論に達した。「友愛図」は、1810年以降ローマで共同生活を営んでいたドイツ人の画家集団「聖ルカ兄弟団」（通称ナザレ派）によって生み出された。聖ルカ兄弟団はフランス革命後のナポレオンによる大陸支配という閉塞的状況の下、解体された神聖ローマ皇帝領のウィーンで設立されている。その芸術は復古主義的との限定的な評価に甘んじているが、その本質は過去の様式や技法の継承ではなく、「宗教改革以前のヨーロッパ」という概念の形象化にある。ナポレオンが「ローマ帝国」の幻影に基づく現実世界におけるヨーロッパの統一を進める一方で、ナザレ派の芸術家たちは「ユートピアとしての一つのヨーロッパ」という未来的ヴィジョンを抱いて、新しい芸術の創造を試みた。一対の同性を表した図像「友情図」は、そのような精神的潮流を象徴する図像とみなされる。「キリスト教的ヨーロッパ」という観念的地理区分は、ナポレオンの登場と平行してドイツ・ロマン主義の思想界に現れた概念であり、造形美術に限定されない思想的広がりを持っていた。ナザレ派の正式名称である「聖ルカ兄弟団」もまた、「ローマ帝国」の幻影に基づく現実世界におけるヨーロッパの統一が進行する一方、ナザレ派の芸術家たちは「ユートピアとしての一つのヨーロッパ」という未来的ヴィジョンを抱いて、新しい芸術の創造を試みた。一対の同性を表した図像「友情図」は、そのような精神的潮流を象徴する図像とみなされる。「カストルとポルックス」「マリアとマルタの家のキリスト」「聖愛と俗愛」といった、「明・暗」「聖・俗」「静・動」「善・悪」等、対極的な特性を表現する図像伝統に依拠しつつも、二者間の相同性、類似性を強調するナザレ派の友愛図は、このような背景のもとに生まれたと考えられる。
以上の内容は2009年2月に慶応義塾大学で開催されたシンポジウムで口頭発表し、また論文に纏めた（雑誌論文の項②を参照）

(2) 平成20年度以降は、友情図に原型的イメージを供給し、かつ時代的にも連続性をもつ二つの図像に注目して研究を進めた。第一にあげられるのが、「分かれ道のヘラクレス」である。17世紀に絵画の主題として成立し、ヘラクレスを挟んで「美徳」と「悪徳」の擬人像が向かい合うこの図像はこの図像は、主人公ヘラクレスを、二つの相反する価値の優劣を決しかねている姿で表現してきた。18世紀後半、この主題は様々な形象的ヴァリアントを経て、両者の対話、融和を促し、その弁証法的な止揚を試みる「調停」あるいは「和解」の表象へと変化していく。例としてはジョシュア・レノルズの《悲劇と喜劇の間のガリク》や、ジャック・ルイ・ダヴィットの《サビニの女たち》におけるヘルシリアの表現を挙げることができる。「和解」の主題は、フランツ・プフォル作《ルドルフ・フォン・ハプスブルクのバーゼル入城》（1810）、カーサ・バルトルディのフレスコ連作《ヨセフの物語》（1817）といったナザレ派の代表的作品でも、繰り返されている。特に後者の作品は、ペーター・コルネリウス、フリードリヒ・オーファーベック、フィリップ・ファイト、ヴィルヘルム・シャードウといったナザレ派を代表する芸術家の共同制作による記念碑的な連作壁画であり、故郷を追われ、遠くエジプトの地で栄達を遂げたヨセフが兄弟と和解する最終場面に、フランス軍の占領下、アカデミズム美術に反旗を翻してウィーンを離れ、ローマで研鑽を積みながら故郷への望郷の念を募らせるナザレ派の画家たちの憧憬が表現されていると考えられる。事実、このフレスゴ画の完成ののち、多くのナザレ派のメンバーたちは名声を不動のものとし、故郷のアカデミーへと招聘される形でアカデミズム美術と「和解」している。
こうした歴史画は、通常「友情図」には数えられないが、対立するものの宥和が主題の通奏低音になっているという点で、「友情図」と同じ動機によって成立いると考えられる。和解によって生まれる、新しい芸術＝宗教の福音の待望が、そこにはこめられているのである。

(3) 最終年度となる平成２１年度は、ロマン主義絵画の友愛表現の原型的イメージの一つとされ、18世紀末から19世紀初期にかけて広範な流行を見せた図像「アモルとプシュケ」に焦点をあてた。「アモルとプシュケ」はルネサンス期に流行した主題であるが、アンシャン・レジームの崩壊とともに神話的人物プシュケが人間と神、生と死の二つの領域を横断し、再生の希望を担う存在として解釈されてい

く。人間と神、生と死の二つの領域の境界に位置づけられる神話的人物プシュケが、フランス革命期、アンシャン・レジームの崩壊とともに再生の希望を担う存在として図像化されていく過程を究明した。その際、ドイツ・ロマン派の画家フィリップ・オットー・ルンゲの絵画作品《ナイチンゲールの稽古》(1805 年) が「アモルとプシュケ」の主題を発展させたものであることから、プシュケ＝ナイチンゲールに託された冥界の旅人のイメージが、バッコスやディアナといった「闇」や「酩酊」を意味する図像との等価的使用を経て、画家の晩年には再生と循環を象徴するアウローラのイメージへと変容する経過を明らかにし、論文に纏めた。対概念として表現される友愛図像は、分析的時代であった十八世紀を超克し、再び全体性を希求する時代精神から発しており、異なる世界を往来しながら半神となって完全性の実現をみるプシュケの図像にはそれが凝縮されているといってよいだろう。
対立する価値を統合するヘラクレス、異なる世界を往来しながら半神となって完全性の実現をみるプシュケには、そうした期待が凝縮されているのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
① 尾関　幸「都市図の中の鏡―エルトマン・フンメル作品を中心に」東京学芸大学紀要　芸術・スポーツ科学系　60 号　2008 年　105～116 頁
② 尾関　幸「ロマン主義美術―循環と再生への期待の形」モノ学　価値感覚研究 3 号　2009 年　89～96 頁
③ 尾関　幸　「フィリップ・オットー・ルンゲ《ナイチンゲールの稽古》―魂の教育者としてのプシュケ」大学美術教育学会誌　42 号　2009 年　79～86 頁

〔図書〕（計 1 件）
① アロイス・リーグル（尾関　幸訳）「現代の記念物崇拝―その特質と起源」中央公論美術出版　2007 年

６．研究組織
(1)研究代表者
尾関　幸　(OZEKI　MIYUKI)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：１０３６１５５２

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：